編　集　後　記

第 6 巻は第 2 号を出すことができました。掲載原稿は 2 件ですが、掲載数は学会誌にとっては必ずしも本質的な問題ではないように思います。本年度の初めに年間 2 回の発刊を目指しましたが、まずこれを実現したことに意義があり、今後年 2 回の発刊が定着出来れば幸いに思います。事務局の方々の尽力に依存すること大ですが、引き続きよろしくお願い申し上げます。

年間 2 回の発刊サイクルを定着させるためには、第一に会員各位のモチベーションの向上・維持が求められます。これは一会員としての自戒を込めているのですが、筆者は 9 月の学術総会で口頭発表を行い、その後、関係する他の研究会で関係する議論を行いつつ 11 月中旬にほぼ原稿をまとめていたのですが、いくつかテーマを深化させたいと考えたので、第 2 号のための原稿提出期限に間に合わなくなりました。そこで、筆者のイメージでは、学術総会（又は討論集会）での発表、2 カ月程での原稿取りまとめ、2～3 カ月程の査読というサイクルが生まれることを期待したいし、心掛けたいと思います。

本号の巻頭言は、溝口忠一氏の手を煩わせました。氏は、第 6 巻 1 号で総合報文『粉体技術の発展と期待－戦後の金属鉱山選鉱技術から新エネルギー燃料開発へ－』を寄稿されましたが、本巻頭言においても粉体技術に関する達意ともいうべき研究者の境地を示しておられます。濱田賢良氏の『噴霧乾燥装置の特徴と設計の実際』は、噴霧乾燥装置を構成する各要素機器の特徴を踏まえた装置設計の現場における実態に関する報告です。今給黎佳菜氏らの『リスク管理人材育成基盤としての「知の市場」－10 年間の発展史とこれから－』は、本学会とも関係の深い「知の市場」の歴史を一つの視点から通観しており、筆者には本学会の一側面を照らし出しているようにも読めました。

本号がホームページで公開されますと、3 月 5 日に設定された春季討論集会が会員諸兄の視界に入って来るように思います。学会誌の年 2 回の発刊と討論集会・総会の半期毎の開催というサイクルが、本学会活動に新たなダイナミズムをもたらすことになれば、学会活動も新たなフェーズに入ることになるのかも知れません。

編集委員長　　須藤　繁